



トキナク森の
龍

wanwao

待ちわびた邂逅にて

――。今の現象を表すならば、何が良いだろうか。
「貴様一つ、予言してやろう」
酷く楽しそうにそう言って、チロリと覗かせた舌の上に炎を散らし、そびえ立つ、くすんだ鈍色を放つはぐれ龍は、熱い息を吐いた。細まった金色の双眸が、ヤグラを射抜く。
「貴様はいずれ、その身をもって一つの命を散らす」
恐怖で固まったヤグラの首元に、その生き物は鋭く大きなを伸ばし、紐でぶら下がっていたペンダントを容易に引き千切った。

掻いていた胡座を解き、ヤグラは手足を伸ばすように寝転んだ。撫でるように頬を風を思い切り吸い込み、一拍置いて吐き出す。だが、心は落ち着く気配を見せない。
「おーい、ヤグラ！ そんなとこいねえでこっち来いよ！」
「あー……、すまん。オレ今回パス」
返答はしたものの、声は届いていないだろう。少し離れたところから自身を呼ぶカドヌキの声に、ヤグラは寝転んだまま宙に腕を上げてヒラヒラと手を横に振った。

夕方振りに訪れたこの場所は、相変わらず平和で穏やかだった。
トキナク森の中心にポツカリと巨大な穴を広げる平原は、その中央部分に向かって緩やかに坂を作り、丘のようになっている。丘の頂上にはツキノワシノギという大樹がその身を大地に根付かせ、鮮やかな深緑を生い茂らせていた。どっしりと構える、力強く伸びる幹が枝葉を横へ横へを広げ、平原に大きな影を作る。太陽が地上高く浮いている今、隙間から揺らめく陽光がヤグラの身体に斑点模様を描き、優しく包み込んだ。
ツキノワシノギの根元には大人の片腕がやっと入りそうな小さなウロがある。一度カドヌキが好奇心に勝てず腕を入れたとき、中には何もなかった。(強いて言うなら、木の葉と泥で彼の腕が汚れたくらいだ)変化のない事実、ヤグラたちのウロに対する興味はその場で消え、それ以上ウロに何かすることはなかった。
この場所に来たとき、この根元で穏やかな時間を過ごすのがヤグラにとっての楽しみだった。読書をするもよし、昼寝をするもよし。走り回っている年下の少年たちには「おじいちゃんみたい」と笑われるが、気にするほど大人げないわけでもない。もちろん、誘われればともに遊ぶこともある。特にカドヌキは世話好きなどころもあってか、ヤグラによく声を掛けた。

「……………」
ザァ、と吹き抜けた風が、ヤグラの頭上の木の葉を揺らす。ぼんやりとその様子を見つめた。眠気は、ない。
『貴様一つ、予言してやろう』
腹の底に響く、重々しい声だった。不意に思い出された記憶に、柔らかな日差しで暖まった身体がブルリと震え、急速に指先から冷えていく。ヤグラは上体を起こし、振り払うかのように慌てて首を振った。
丘の下の方で楽しそうな声がある。顔を向けた方向では、カドヌキが周りにいる幼子たちの一人の両脇を抱えてグルグルと回転している姿が映った。嬉しそうに声を上げる幼子に、周囲にいる子たちも同じことをせがんでいる。
幸せそうに笑い合うあの中に入る気にはなれなかった。かと言って、ここで寝る気にもなれない。無意識に片手を首元に持っていく。空を切る手に溜め息を吐く。肌身離さず持っていたペンダントはあの日を境に彼の手元を離れてしまった。ヤグラの頭の中に、ペンダントを落とした場所が浮かぶ。

「――カドヌキ！」
幼子を下ろしたタイミングを見計らって大きな声で呼びかければ、彼は目を瞬かせてヤグラを見た。
「オレ、少しここから離れるから！ 夕方までには院に戻ると思う！」
返事を聞く前にヤグラは素早く身を起こし、カドヌキたちがいた場所とは反対側の坂を下る。震える足で向かうのは、目の前にめく森だ。
丘を囲うように群生する植物がその身を寄せ合って形成された森は、に五十メートルを超える大木だけではない。鋭い触覚で獲物を補足するカリツタ。平衡感覚をなくすほど甘い匂いを放つミツアケビ。空気の振動で淡く発光するヒカリゴケ。――どれもこれも絶滅したはずの植物だった。
普段ならば立ち入るはずのない、異界。通るはずのない、怪道。
足を進めた先は風さえも起こらない、深い、深い、森の奥。陽光の遮断された獣道はヤグラの動きによって周囲に風を作る。足元に繁殖するヒカリゴケが反応してぼんやりと道を照らし出した。心に余裕を持った者ならば幻想的だと感嘆の息を吐いていたに違いない。木にぶら下がるカリツタが時折意味もなくブラブラと揺れ、ヤグラに触れようとする。絡め取るうと躍りになっているカリツタを、ヤグラは眉を寄せて避けた。
獣道を突き当たりまで進んで行けば、森の最深部と言える平坦な広場に出る。大きく拓かれたそこは、周囲に密生する大木が広げる枝葉によって頭上からの光を遮断されていた。群生する名も知らぬ野草が青々と足元を覆う。
そして、そこにこそ、ヤグラがここに来る羽目になった原因がいた。

そいつは、直径五メートル、全長十メートルはくだらない蛇のような胴体を巻いて、前に会った時と変わらない姿で、静かにそこに鎮座していた。ヤグラの何倍もの巨体を狭苦しそうに丸めて、自身の胴体に長い頭を乗せて、以前覗いていた金色は形を潜めていた。そいつは眠っているように静かだった。巨大な岩のように動かなかった。
ガサリ。足元で草が鳴る。慌てて龍を見たが、反応はなかった。
ホッと息を吐く。わざわざ危険が増すようなことはあってほしくない。さっさとペンダント見つけて帰ろう。そう、慎重に足を動かした、――その時だった。

「――何かと思えば、」どっしりと威圧感が支配する。向かった目線の先では、臉は閉じられたまま、その大きく横に裂けた口が動いていた。チリチリと炎が覗き、その周囲が明るくなる。フン、と鼻息が草を揺らした。「いつぞやのではないか」
ゆっくりと開かれた双眸がヤグラを捉える。吸い込まれそうな金色の瞳がカチリとヤグラで停止して、嬉しそうに細まった。
「……そう硬くなるな。このような場所に、何用だ」
起こってしまった出来事に対処出来ず固まってしまったヤグラに、龍は何もしないでも伝えるかのように声音を和らげた。「――っ、ペ、ペンダントを」ハッと意識を戻し、どもりながら口を開いたヤグラに、龍はああ……、と何かを思い出したらしく、グッと首を持ち上げた。その動作に反射的に怯えた姿に低く喉を鳴らし、鉤爪に引っ掛かったペンダントをヤグラの前に差し出す。
「童が探していたのは、これだろう」
「あっ！」

ペンダントを目にした瞬間、ヤグラは飛び付くように鉤爪に手を伸ばした。切れた紐が少し汚れているものの、ペンダント自体は壊れた様子がない。何かの爪に形作られたペンダント。ヤグラが孤児院に入る前から持っていたそれは、顔も知らぬ父親からの贈り物だった。愛情を感じたことのない人間からの贈り物。それでも不思議と捨てることなく、肌身離さず宝物のように大切にしていた。
無事だったことに安堵の息を漏らす。同時に今自分がどのような状況にいるかも思いだして慌てたが、龍は何もせず、ただジッとヤグラとそのペンダントを見つめていた。再び緊張し始めたヤグラ。その姿に龍はフン、と鼻を鳴らした。
「もう、迷うな、幼き童よ」
「なっ、ガ、ガキじゃねえよ！」
緩んだ空気に思わず合いの手を入れてしまったヤグラがヤバイと顔を青褪めると、龍は可笑しそうに笑った。「そういうところが、童なのだ」
その言葉に呆氣にとられるヤグラに再び龍は笑う。呆然と龍を見つめるヤグラの中で、危機感はいかに消え去っていた。
それから、ヤグラはその場所を幾度となくも訪れることとなる。

とめどない沈殿にて

己ははぐれ龍なのだ、そいつは言った。満月の夜に移動を行うツキノセリウの一匹なのだ。この地に降り立ちどれほどの時間を過ぎたのか、もう覚えていないらしい。

ガサガサと足元の草を鳴らして近付けば、そいつは億劫そうに唼を押し上げた。金色の眼球がヤグラを見止め、認識したと同時に力が抜けたように再び唼が閉じられる。ガサガサガサッー。音は龍の口の前で止まった。龍の鼻息がヤグラの服を揺らす。

「――また来たのか。貴様も物好きな童よ」
「や、暇だったしな。てかオレは童じゃなくてヤグラって名前だって言ってんじゃん」
ヤグラが龍に会いに行くとき、いつも丘から続く獣道を通る。だが、獣道、であるはずのその道で、ヤグラは森で動物と出会ったことがなかった。く植物（主にカリツタ）になら何度か襲われたことがある。それで騒いだときも、動物が現れることはなかった。会わないなら会わないで、安心するから不満もない。ヤグラは考えることを早々に放棄した。

龍はヤグラの名を呼ばない。いつも「童」と彼を呼ぶ。何度目かの邂逅で、ヤグラは自己紹介し、そして龍にも名を聞いた。だがその返答はあまりにもあつげなく、それが当然であるともいう態だった。

『――我に名などない』
彼らの種族に固有の名は必要ないという。ならば呼ぶときどうするのかと聞けば、呼ぶ機会がないと返された。付けてやろうかと問えば、いらん、と簡素な拒絶を示された。

龍はいつも怠そうにその巨体を沈ませていた。諦観を持ち、物事を放棄していた。
「トキナク森」の由来もこの龍から来たのだと、一度目の邂逅を終えた後に知った。孤児院の院長にそれとなく森のことを聞いたとき、院長は穏やかな口調で語ってくれた。

何百年も前、この地に恐ろしい現象が起こったのだという。夜な夜な、森から身体が縮み上がるほどの咆哮が聞こえてきたのだ。それは大地を揺るがし、人々を恐れられた。まるで大地が打ちひしがれているようで。まるで天がその身を引き裂こうとしているようで。――生きている刻を、殺してしまいうで。

だから、“刻哭く森”で。
龍自身にも聞いた。今でこそこうして緩やかに時間が過ぎるのを甘受しているが、この地に墜ちてしまった直後は夜な夜な咆哮を上げていたのだ。「一童よ」思考に耽っていたヤグラはハッとして龍を見上げる。

「異界に耽っていた予言は意味を為せそうか」龍はいつも森の外を“異界”と呼んだ。クツクツと鳴らされた低い笑いが地面を這う様を見ながら、ヤグラは馬鹿馬鹿しいと溜め息を吐く。

「意味がすわけないだろ。オレに人殺しになれってか」
「……貴様はまだ、気付かないのだな」呆れたように、それでいて疲れたように。龍もまた、溜め息を吐いた。フルフルと首を横に揺らす。
「まあ、いい。おのずとは満ちるだろう」
あと四日で満月だ。そう呟いた龍は、愛おしげにヤグラを見つめた。

『童よ、よく聞け。満月の晩、ツキノワシノギのウロに手を入れる。そこにあるものを持って、我のところに来るがいい』
去り際、真剣な表情で龍は言った。ヤグラは首を傾げつつも言われた言葉通りに満月の夜、丘の頂上に腰を据えるツキノワシノギの根元に来ていた。木漏れ日のように降り注ぐ月明りが草原に陰影を作り、緩やかな風がサワサワと葉を鳴らす。ウロは相変わらずその根元でぽっかりとだらしなく口を開けていた。

「ウロ、ってやつばここだよな」
以前カドヌキが手を入れたときは何も出てこなかった。
半信半疑でヤグラは腕をウロの中へと進める。慎重に手探りで入れていけば、指先に硬質な物体がぶつかった。驚いてビクリと肩を揺らし手を引き抜いてしまったが、数秒後、深呼吸を一つして再度ウロに手を入れた。

出てきたのは三日月のように反った一本の短剣だった。金色がかった刀身がぼんやりと光を放っていた。――本物の三日月みたいだ……。見惚れたヤグラはそんなことを思った。

だが本来の目的を思い出して慌てて短剣を手には森の中へ足を踏み入れる。ガサガサと大きな音を立てて広場に辿り着けば、龍は喉を鳴らしてヤグラを迎え入れた。

「来たか、童よ」
「ヤグラだってば。んで？ 何なんだよ」持った短剣を見せるように持ち上げる。「こんなもの持ってこさせて」
「……貴様はこの森に入り、可笑しいと思ったことはないか？」

ヤグラの話を通し、龍は凧い金色の瞳をヤグラに向けた。龍の言葉にヤグラはビクリと反応を示す。思い当たる節はいくつもあった。
「この森の刻は死んでいる」そっと、秘密話をするように、龍は囁いた。「我が殺したのだ。ヒトリは寂しい。だから、殺して、止めて、動かぬようにした」
この森のものは死なぬ。動物も植物も。殺さない限り、寿命では死なぬ。だが、腹は減るのだから。よく我のもとに来たが、狐が、が、随分前から来なくなつた。他の動物たちに喰われたのやもしれん。最後に生き残ったものは、きつと飢えて死んだのだろう」

寂しように語られた真実に、ヤグラはあり得ないと思う反面、頭の片隅は納得したように頷いていた。だから獣道で動物に会わなかったのかとか、だから森の木々は一年中葉を付けて四季を感じさせないのだとか、絶滅したはずのカリツタやミツアケビやヒカリゴケが存在していたのかとか、浮かんだことのある疑問は解答を導いた。

「もうどれだけの月日が過ぎたか知らぬ。だが、はるか昔。我がここに墜ちてそれほど経たぬ頃だ。貴様のように一人の童が我の前に現れた」
「わらし……」

「奴も酔狂な人間だった。“刻哭く森”の原因となった我を殺すよう他の人間から言われ、そのためにやって来た奴は、幾度となく我のもとに足を運んで楽しそうに異界の話をしていった。――だがそれも長くは続かぬ。奴が生きた時代は人間たちの不毛な戦が激しかった。奴もそこに駆り出されたのよ」
今となっては大きくなったこの国も、昔は領土争いが激しかった。史実でしか知る術がない、過去のお話。

『すまない。もう、ここには来れそうにないんだ』
「申し訳なきように顔を歪めて、奴は笑っていた。我としても話相手がいなくなるのは寂しいものがあつてな。銭別代わりに一つ、送ったのだ」龍がゆっくりと腕を上げ、鉤爪はヤグラの首元に向けた。「その首飾りについては、我の、童」

随分と縮んでしまったようだがな。そう呟く龍をヤグラは前に絶句する。
「貴様はその首飾りを持って我の前に現れたとき、思わず奴が戻ってきたのかと思ってしまった」自嘲した、だが嬉しさに溢れた金色が、ヤグラを射抜いた。「陳腐な言葉だが、運命を感じたのだ。このどうしようもない我に、選ばれる機会が訪れたのだと」

返事など求めず、一人語りのように龍は言葉を落とす。
「刻は移ろわなければならぬ。この森も、生きたいと疼いている。――ならば、原因を排除すれば良いだけのこと」

「げ、んいん……」
「――殺せ」たった一言、だが、されど一言だった。端的に、簡素に、龍はただヤグラを見つめて言った。「我を、殺せ。童よ」

「――そつ、そんなこと、出来るわけねえだろ！」
「どういった経緯でその爪を貴様が持っているかなどはどうでもよい。我が託した爪を持っている、貴様が我を殺す十分な理由だ。だから、貴様にその短剣を持って来させた」

我ら龍族は人間の武器では簡単に死なぬ。必ずウロを作り、その中に月の欠片を溜めるツキノワシノギから取れる短剣ならば、あっさりと我らは死を迎えることが出来るのだ。えたように満月の夜にだけ、実体と化する。

諭すように龍はヤグラに語りかける。それでもヤグラは首を横に振り続けた。
「で、でもっ！」

「我はもう疲れたのだ。我を思うてくれるなら、殺せ、童」
冗談でもない。妄言でもない。戯れ言でもない。それは静かな懇願だった。疲れ果てた世界に訪れた変化に対する、哀しいほどの希望だった。

「貴様には申し訳なく思う。だが、頼めるのは貴様だけなのだ」
殺せ。そう、ヤグラに首を曝け出して龍は頭を垂れた。ヤグラだけが戸惑っていた。出来るわけがない！ やりたいわけがない！ 逃げ出してしまいたい！

――だが、ヤグラにだけ可能で、ヤグラにだけ宛てられた思いでもあつて。
風の起こらないこの森は音がない。ただ、龍とヤグラの呼吸だけがひっそりと聞こえてくるだけ。バクバクと暴れる心臓を上から押さえ付け、ヤグラは目を閉じた。そして――。開いた瞬間、ギッと龍を睨み付けた。視界が滲む。噛み合わせた歯がギチリと嫌な音を立てる。感情を投げ捨てるように大きく振りかぶった腕は、まるで自分とは違う意思を持っているかのように龍へと引き寄せられた。心臓が耳元で煩く跳ねる。

「あああ、ああああああああ！」
首から噴き出した血が宙を舞う。赤に染まる隙間から、嬉しうに歪んだ口元が見えた。「それでいい、ヤグラ」か細い声。このとき初めて、龍はヤグラの名を呼んだ。

『――貴様一つ、予言してやろう』
あのとき。悟ったように低く喉を鳴らした龍は今、安心したようにその身を崩して動かなくなった。美しかった金色は、どろりと濁って光を呑み込む。

――びちゃん。
びちゃん、びちゃん、びちゃん。

鈍色の鱗の隙間から零れ落ちる血が、赤い水溜まりに波紋を生み出していく。ぼんやり月の光を放つ刀身から血が流れ落ちる。びちゃん。滴と触れ合って波打つ赤色はまるで生きているように揺らめいた。びちゃん。――綺麗だと思った。

『お前はいずれ、その身をもって一つ命を散らす』
断定的な物言いだつた。散らす“だろう”、という推定が入ることはなかった。

「……そりゃあ、断定的にもなるよなあ」

自分の命のことなんだから。

ははっ、乾いた笑いが漏れる。ポロポロと溢れ出した涙が頬を伝って地面に落ちた。びしょん。透明な水滴が、赤色に波紋を呼んだ。

静かなる再会にて

一年前のあの日から、ヤグラは不安定になり荒れた。
あの日、どうやって森から返ってきたのか本人もわからぬまま、ヤグラは血に濡れた服で孤児院に辿り着いた。夜明け前、太陽が出る前だったおかげか辺りはまだ暗く、人もいなかったために服を見て騒ぐ輩はいなかった。おぼろげな記憶さえもないままに、ヤグラを見つけて慌てたカドヌキによってその場をいた。
だが、その日からのヤグラは人が変わったように世界に怯えた。朝の光を嫌い、昼の活気のみ、夜の闇にされ、時折壊れたようにび泣いた。ある者はそんなヤグラを恐れて距離を置き、ある者はカドヌキのように真摯にヤグラのために尽くした。
原因を知っている者はいない。原因はヤグラだけが知っている。誰かに語られることもない。宝物のように、記憶の海に沈ませ、色褪せることなく鮮明なままそれは残されている。――一年経ってやっと落ち着くことが出来たヤグラにとって、その事実だけが心に安らぎを与えた。
「ヤグラ？ 出かけるのかよ？」
孤児院の門を出ようとしていたところでヤグラはカドヌキに呼び止められた。眉を顰め、不安を瞳に乗せて声を掛けたカドヌキは、顔に心配の色を滲ませてジッとヤグラを見つめる。最近になって外出が出来るようになったヤグラ。そんな彼が出かけようとする姿を見る度、カドヌキは声を掛けずにはいられなかった。
「――ん、まあ」
「でもよ、」
「はは、大丈夫だって。心配し過ぎ」酷く自分を心配するカドヌキに、ヤグラは呆れたように笑い、ありがとな、そう言ってカドヌキに背を向けた。
孤児院を出て向かった先は、一年しか経っていないのに酷く懐かしく思える、ヤグラにとって大切な場所だった。
「一年ぶり、かあ……」
零れた言葉に苦笑して、思わず止まってしまっていた足を再び動かし始める。
鬱蒼と生い茂っていたトキナク森は、朽ちた木々が立ち尽くすだけだった。止まった時間が動いた森は葉を散らし、寿命を迎え、朽ちていった。新しい芽が枯れた大木の隅で双葉を実らせ、青く青く輝く。カリツタも、ミツアケビも、ヒカリゴケも、その姿を消し、陽光が枝の隙間から洩れていた。森の中が明るい。それだけで、以前とはまた違う、異界のように思えた。
通る者がいなくなった獣道は草に覆われ、姿を失くしていた。それでも身体は覚えているのかずんずんと獣道だった道を進んでいく。
辿り着いた、拓かれた広場には何もなかった。土は赤黒くなかった。骨はなかった。
「なあんも、ねえや」
オレと、アイツが過ごした、証も。幻であったように。頭上から零れ落ちるの光に、呼吸を始めた母なる大地に、消えてしまった。
「――ばあか」
疲れたお前と話すことが楽しかったオレは、これからお前が消えた世界を、お前が過ごした場所が消えた世界を生きていく。……ああでもきつと、お前と過ごした時間を忘れることはないだろうな。
「とりあえずこの森の土地を確保することが先決、かな」しゃがみ込み、赤く染まったはずの場所を撫でる。サラサラと土が擦れた。
「お前が生きた証は俺が守るよ」
土を撫でる手とは反対の手で首にかかる爪のペンダントを握った。

トキナク森の龍

<http://p.booklog.jp/book/63731>

著者 : wanwao

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/wanwao/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/63731>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/63731>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ